

道徳的真理・ミニマリズム・非認知主義

秋 葉 剛 史

「拷問は第二次大戦中の日本でも行われた」という文は、拷問についてのある事実を記述しようとするものであり、真ないし偽でありうる。ではこれと同様に、「拷問は悪い」のような道徳文——道徳的価値の帰属を含む文——もまた真や偽でありうるだろうか。周知のように、メタ倫理学上の非認知主義に属する初期の論者たちは、この問いに明確な否定的答えを与えた。彼らによれば、道徳文は通常の記述文とは異なり、そもそも真偽を問いうる種類の文ではないのである。しかしその後、非認知主義者の多くは、道徳文にも真偽は帰属可能であり、その一部は実際に真であるということ認められるようになる。これは一見したところ劇的な変化だが、それを可能にする根拠としてしばしばもち出されるのが「ミニマリズム」と呼ばれる真理論上の立場である。これはその名の通り、真理概念の内実をごく最小限のものとして捉える立場であり、それに従えば、ある

文を「真」と呼ぶことに伴う実質はないに等しい。それゆえ非認知主義者であっても、一部の道徳文は真だと主張することをためらう必要はなくなるといわけだ。

しかし非認知主義者は、本当にこのような仕方では道徳的真理を確保しようとすべきだろうか。私見ではその答えは「否」であり、本稿の目的はそれがなぜかを示すことである。そのための理由の一つは、すでに多くの先行文献で論じられている「侵食的ミニマリズム (creeping minimalism) (Dreier 2004) の問題だが、本稿ではこれに加え、従来(少なくとも表立っては)論じられていない懸念をさらに二つ指摘したい。すなわち予告しておく、ミニマリズムによって道徳的真理を確保するという右の方針は、道徳外の真理について大半の非認知主義者が望まないはずの見解を彼らに強いることになり、また、一部の非認知主義者(準実在論者)が実際に取り組ん

できた課題の意義を不可解にしてしまう、という二つの難点も抱えるように思われるのである。以上のような否定的議論に続き、本稿の最後ではより積極的な提案を行う。それは、非認知主義者が道徳的真理を確保しようとするなら、ミニマリズムではなく「真理の機能主義」という立場 (Lynda 2009) を採用すべきではないか、という提案である。後でみるように、この真理論はそれ自体としても興味深いものだが、ここでは特に非認知主義との関連でその魅力を論じることにしたい。

なお断っておくと、筆者は現時点で必ずしも非認知主義に与する者ではないが、この立場が真剣に考慮すべき重要な洞察を含むものだとは考えている。本稿は、このような見立ての下で非認知主義のよりよい形態を探ろうとするものであり、ここでの議論はより広く、メタ倫理学の論理空間全体を見直す上でも一定の貢献をするのではないかと思う。

本稿の議論は以下のように進む。まず第1節では、非認知主義者が真理のミニマリズムに訴えるまでの経緯を確認し、第2節では、その方針に対して生じる侵食的ミニマリズムの問題について論じる。続いて第3―4節では、この方針に関する懸念を二つ追加し、第5節では真理の機能主義によって以上の問題がどう解決されるかを考察する。

1. 初期の非認知主義と真理のミニマリズム

まずは非認知主義の基本的発想を確認しよう。よく言われるように、この立場の発想は、道徳实在論 (以下単に「实在論」とも呼ぶ) をとった場合に生じる存在論的・認識論的な問題を背景におくと理解しやす⁽³⁾。(Blackburn 1984: 169; Chrisman 2008: 335ff.; Schroeder 2010: ch.1)。道徳实在論によると、「拷問は悪い」などの道徳文は、「雪は白い」といった通常の記述文と同じく何らかの事実を記述・表象することをその機能としており、かつ道徳文の一部は実際に真である。よって实在論に従えば、世界には道徳文によって記述されそれらを真にするところの事実が存在し、また我々の道徳的認識はその種の事実への認知的アクセスのうちに存するということになる。しかし言うまでもなく、こうした事実やアクセスがこの自然的世界の中でいかに成立しうるのかを理解することは容易でない。なぜなら、もし存在するとすれば道徳的事実は、我々の欲求や目的などとは関係なく我々に一定の行いを命じる特異な力をもったものだと考えられるし、そうした特異な存在者を捉えるための特別な認知機構が我々に備わっているとも思えないからである (Mackie 1977: 38ff.)。非認知主義は、まさにこうした問題を解決 (ないし解消) するための大胆な試みとして位置づけられる。つまりそれは、右のような問題の大元になっている意味論的な仮定を否

定し、道徳文の意味機能は記述文のそれとは本質的に異なる、と主張する立場である。もし道徳文がそもそも記述・表象するのでないなら、それに対応する事実の本性や、その事実を対象とした認識の成立可能性について悩む必要はまったくなくなるわけだ。

そして初期の非認知主義者は、この考えをある極端な仕方です式化した。例えばA・J・エイヤーによると、「拷問は悪い」などの（純粹な）道徳文は、拷問に対する話者の否認感情を表現するものにすぎず、真でも偽でもありえず（Ayer 1946: 107ff.）。この文ははして言えば「拷問反対!」と同様の意味をもつにすぎず、それが真偽の値をとりえないことは、「カーブ優勝バンザイ!」や「ちくしょう!」などがそうでないのと同様である。

しかしこうした極端な定式化には、明らかかな困難がある。それはひとことで言えば、道徳文の使用を含む我々の日常の実践は、むしろ明白に実在論的な見方（特に道徳文の記述文への同化）を支持するという点だ。ごく単純に考えても、我々はしばしば「正しい」道徳的意見とそうでないものを区別しているし、記述文の場合と同じようにそれぞれの「理由」を与えたりたずねたりする。また統語論的にみても、道徳文は記述文と同様の仕方です文未満の単位へと分解されるし、否定や条件法などの真理関数的操作、時制、様相、量化表現などの適用を許容する（Chrisman 2008: 337f.）。さらに道徳文は、他の文とさまざまな論理的関係（含意・矛盾・両立など）

に立ちうるが、それらの関係は道徳文が真理値をもつと想定することで最も自然かつ体系的に説明されるものである（Schroeder 2010）。

これらの観察は、それ自体としては月並みなものだが、非認知主義にとっての重要な課題に目を向けさせてくれる。言うまでもなく、非認知主義は何か架空の文カテゴリーについてではなく、あくまで現に使用されている道徳文の意味機能について語っている。そうである以上、非認知主義は、我々の実践の中で道徳文が現にもつ特徴を単純に無視するわけにはいかない（もしそうすれば現実の道徳文についての理論ではなくってしまふ）。そして、もしこれらの特徴は単に我々の体系的錯誤（Mackie 1977）や集団的虚構（Kalderson 2005）から生じたものだといった主張をするのでないとすれば、非認知主義は、それらを何らかの形で取り込むaccommodateことつまり、正しいものとして解釈し承認することができなくてはならない。以下ではこれを、非認知主義にとっての「取り込み課題」と呼ぼう。

この取り込み課題を真面目にとる限り、エイヤーのように道徳文は真でも偽でもない突っぱねて話を済ますことはできない。むしろ非認知主義者は、道徳的真理（真である道徳文）が存在するということは何らかの形で認める必要がある。とはいえもちろん、彼らは伝統的な対応説の意味でこのことを認めるわけにはいかない。と

いうのも、対応説の下で道徳的真理を認めることは、それを真にする世界内の事実を認めることに他ならず、そうなる⁽⁶⁾と前述した存在論的・認識論的な問題はまったく解消されないからである。

ではどうすればよいか。ここで一見非認知主義の助けになるように思われ、現にしばしば示唆されるのが、「ミニマリズム」という真理論の立場である (Blackburn 2006: 160; Draier 2004: 25f.; Gibbard 2003: 63, 248; Schroeder 2010: 154f., 167; 佐藤 2012: sec.2.3)。実際のところこの名称で呼ばれる立場は一つではないのだが、目下の文脈でもち出されるのは「デフレ主義」として知られる次のような見解だ (Horwich 1998)。伝統的な真理論の想定に反して、「真」という語は、文がもつ何らかの実質的な性質——〈事実と対応する〉や〈斉合的信念体系に含まれる〉など——を表すものではない。むしろこの語は、文やその集合に対する話者の同意や承認を利便的に(繰り返しを避けたり等々)表明するための道具にすぎない。そしてこの語の意味は、それが文に何も付け加えないことを示す次のような同値原則によって完全に表される。すなわち任意の文Sについて、「Sは真である」と主張することは、S自体を主張することとまったく等価である——言い換えれば、前者を主張できるときには、かつそのときに限り後者を主張できる——といった原則である。たしかにこのような真理論の下では、真なる道徳文の存在を認めることは非認知主義者にとって容易になる。なぜなら非認知主義者

であっても、ある種の道徳文(e.g. 「拷問は悪い」)を誠実に主張することは当然可能であり、一般に「Sは真である」と主張することがSを主張することに他ならないのであれば、彼らはそれらの道徳文を真なるものと呼べるからである。そしてもちろん、このような仕方では道徳的真理を認める際に、道徳的事実などに訴える必要はない。よって、ミニマリズムをとることにより非認知主義者は、実在論から生じる問題を避けつつ、道徳的真理の取り込み課題を達成できたことになる。

2. 侵食的ミニマリズムの問題

だが導入部で述べたように、このような論じ方は非認知主義を利用するものではないと思われる。より明確に述べると、以下で反対したいのは、ミニマリズム(デフレ主義)を根拠として道徳的真理を確保するという方針、すなわち「真理のミニマリズムは正しい、それゆえ、非認知主義者は道徳的真理が存在すると言える」と論じる方針である。以下ではこれを「ミニマリズム作戦」と呼ぼう⁽⁷⁾。本節ではこの作戦の問題の一つ目としてJ・ドレイアが「侵食的ミニマリズム」の問題(Draier 2004)と呼ぶものをみていく⁽⁸⁾。

最初に確認すべきは、ミニマリズム作戦をとる非認知主義者は、自らの立場を再定式化する必要に迫られるという点だ。というのも、初期の非認知主義者は道徳的真理の存在を否定することで自身の立

場を实在論から区別できたのに対し、ミニマリズムをとり道徳的真理を認めるようになった非認知主義者にはそれができないからである。周知のように、ここで非認知主義者はその区別を心的領域において確保しようとする。背景となるのは「表出主義 expressivism」⁷すなわち、一般に文の（誠実な）発話は何らかの心的状態を表出し、各々の文の意味はそれが表出する心的状態が何であるかによって決まる、という考えだ。この背景の下で非認知主義者は、通常の記述文が表出するのは信念であるのに対し、道徳文が表出するのは信念以外の心的状態（態度や規範受容など）だと主張する。实在論者であれば、通常の記述文と道徳文はどちらも信念を表出すると考えるはずだから、これはたしかに非認知主義を实在論から分かち主張になるだろう。

だが、道徳文が信念を表出しないという考えは維持可能だろうか。問題となるのは再び、前節でみた取り込み課題である。例えば、我々はごくふつうに『拷問は悪い』と次郎は信じている』といった仕方、道徳文が表出する心的状態をまさに信念として分類している。また問題の心的状態は、適切な証拠や推論に基づいて獲得ないし改訂されるようなものとして扱われるが、こうした特徴は信念にこそ固有のものであるようにみえる。さらには、道徳文は真偽の値をとりうるという（ミニマリズム作戦がすでに承認済みの）ポイントも同様の結論を支持する。というのも、道徳文が真や偽であ

りうるためには、それが表出する心的状態もそうでなければならぬはずだが、真偽を問える心的状態とは信念（少なくとも認知的状態）に他ならないはずだからである（鈴木 2013: 33; Jackson et al. 1994: 294）。

このように我々の日常の実践では、道徳文によって表出される心的状態は信念であること、つまり道徳的信念と呼びうるものが存在することが認められている。よって非認知主義者は、こうした語り方に関しても取り込み課題を果たさねばならない。だが、たとえ道徳的信念を認めるとしても、非認知主義者は当然それを「何らかの事実を記述・表象することを機能とする心的状態」という意味で認めるわけにはいかない。そうすることは、实在論の諸問題を再浮上させるだけだからである。ではどうすべきか。ここで非認知主義者がとりうるのは、信念に関してもミニマリストになる道、つまり「信念Pをもつとは、単に真偽評価可能な文Pを誠実に主張する用意があるということにすぎない」とする道だ（Asay 2013: 215; Christman 2008: 343ff.）。こうすれば、道徳的事実の存在にコミットすることなしに、道徳文が表出する心的状態は信念だという点を認められる。一般に「信念」の概念自体を薄めておけば、道徳の領域でそれを認めてもコストはないわけである。

しかし話はさらに続く。なぜなら我々の道徳実践は、道徳的真理や道徳的信念だけでなく、道徳的命題、道徳的事実、道徳的性質と

いったものについての語りも含んでいるからである。つまり右と同様に、非認知主義者はそれらもまた取り込む必要がある。そしてその取り込みを無害な形で済ませようとするなら、彼らは次のような仕方、それぞれに関してミニマリズムをとるべきだと思う。

道徳的命題は存在する——なぜなら、ある文Sが真偽を問えるものであるときにも、我々は「命題S」について語ってよいから。道徳的事実が存在する——なぜなら、ある文Sが真であるときにも、我々は「事実S」について語ってよいから。道徳的性質は存在する——なぜなら、ある真な文が述語Fをもつときにはいつも、我々は「性質F」について語ってよいから。このようにして、非認知主義者は取り込み課題をいわずに一挙に達成できることになる。

だがこれは、過剰な成功にみえる。メタ倫理学の「古きよき時代」(Dreier 2004: 23) においては、道徳的真理、道徳的信念、道徳的命題、道徳的事実、道徳的性質などの存在を認めることは、実在論を他の様々な立場から区別する徴表だった。しかしいまや、非認知主義がこれらすべてを認められるようになったとすれば、それはもはや主張内容の点で実在論と何ら変わらなくなり、その代替案としての身分を失ってしまうように思われる。ポイントを整理してみよう。もともと非認知主義は、(i) 実在論から生じる存在論的・認識論的な問題を避けつつ、(ii) 我々の道徳実践がもつ特徴についての取り込み課題を達成する、という二つの目的をもってい

た。そしてまずは道徳的真理に関して、この二つを同時に果たすためミニマリズムをとることは魅力的に思われた。しかしこれはただの一步では済まない。なぜなら (i) と (ii) という二つの課題は、真理だけでなく信念や事実などに関してもまったく同様の仕方で行うからである。ドレイアが言うように、「ひとたびミニマリズムが侵食し始めると、それをどこで止めてよいかわからなくなる」(Dreier 2004: 29)。そして侵食の果てには、非認知主義はもはや独自の立場であることを止めてしまっているのだ。

さて以上のような侵食的ミニマリズムの問題に対しては、すでにいくつかの応答が試みられている。それらは基本的に、従来メタ倫理学上の区別に役立ってきた道徳的真理や道徳的信念などについてはミニマリズムを認めた上で、「それ以外の何らかの点で非認知主義は実在論から区別されるか」を問うものである。代表的なものとして挙げておくと、この問題を提起したドレイア自身はA・ギバードらに拠りつつ「説明」(Dreier 2004: 32f.; Gibbard 2003: 183, 187) S・ブラックバーンは「表象」(Blackburn 2006: 160) M・クリスマンは「推論的役割」(Chrisman 2008: 349ff.) といった概念にそれぞれ訴えることで、非認知主義を独自の見解として保持できるということを示そうとしている。

しかしこれらの応答が有効かどうかは定かでない。ここで個別の検討に立ち入る余裕はないが、共通する懸念は、それぞれの応答で

鍵となる概念もまたミニマリズムに侵食されるのではないかというものだ (Asay 2013: 217f)。例示のためドレイアの提案をとろう。彼によると、实在論と非認知主義は、道徳的信念が特定の内容をもつことを説明する仕方において異なる。すなわち、实在論はそのため自然的信念の場合と同様何らかの事実をもち出すのに対し、非認知主義はそれを避ける。しかしながら、もし非認知主義がすでに (ミニマリズムにより) 道徳的事実を手に行っているのなら、それを用いた信念内容の説明——この信念が P という内容をもつのは、それが、事実 P が存在するとき真であるものだからだ——を拒否する理由はないように思われる。⁽¹⁰⁾ 一般に、ミニマリズムによって膨張した非認知主義を实在論から区別することは予想以上に困難なのである。

3. 道徳以外の領域へのミニマリズムの侵食

以上の問題に加えて、筆者のみるところミニマリズム作戦にはさらに二つの懸念がある。右の議論との関連で言うと、それらはともに、前節でみた侵食過程の一步目である真理のミニマリズム自体から生じる懸念であり、それゆえ、たとえ (直前で主張されたように) ミニマリズムの侵食を真理以外のどこかの場所で止められるとしても残る問題だ。

その中身をみるに当たり、まずは真理のミニマリズム——ここで

は前述のタイプの「デフレ主義」——がどのような主張を含んでいるかを改めて確認しよう。すでにみたように、ミニマリズムによれば「真」という語は同意や承認を表出するための道具であり、その意味は、「S は真である」を主張できるのは、S を主張できるときでありかつそのときに限る」といった同値原則によって表される。

だがここで注意すべきは、このような原則それ自体はミニマリズムを他から区別するものではないという点だ。なぜなら、例えば対応説の支持者であっても、「真」という語がこうした原則を満たすことは特に問題なく認められるからである。むしろミニマリズムの固有性は、それが否定することのうちにある (Williams 2002: 148)。確認すると、対応説や斉合説といった伝統的真理論は、真理の本性 nature の説明を目指していた。つまりこれらの説は、さまざまな文が真であることの根底にあり、それらの真理性を成り立たせる、ないし構成する constitute 何らかのより基礎的な性質が存在するという前提の下、その性質が何であるかを問うていた。これに対してミニマリズムは、真理がこのような意味での本性をもつことを否定する (Horwich 1998: ch.1)。すなわち、「真」という語の使用を制約する根底的特徴などといったものではなく、文の真理性が何に存しているかといった問いにも答えはない。要するに真理については、哲学でよく試みられる「構成的 constitutive な説明」——福利は選択充足に存しているとか、因果関係は恒常的連接に存しているとか

いった類の説明——を与えることができないのである。

だがそうなると、ミニマリズム作戦は一見したほど無害ではないことになる。第一の懸念は、ミニマリズムの侵食は従来論じられてきたのとは別の方面にも及ぶのではないかというものだ。前節でみたように、従来の議論で焦点になっていたのは、ミニマリズムが「道徳的真理」から発して道徳的信念や道徳的事実などへと侵食するのではないかという懸念である。しかし実のところミニマリズムの侵食は、「道徳的真理」から発して他の言説領域の真理へ、という方向にも向かいうる。例えば、物体の形に関する文（*e.g.*「この皿は円い」）が真であるとき、その真理性について対応説的な説明（「その文が真なのは、それが世界に存在する事実と合致しているからだ」）を与えたいと思うことは自然だろう。だがこうした説明を、ミニマリズムが受け入れられるとは思えない。なぜなら前述のように、ミニマリズムによれば、一般に、文の真理性がそれに存しているところの何か（真理の本性）などは存在しないからである。そして同じことは、数学的真理、法的真理、様相的真理、等々についても言える。すなわち、ミニマリズム作戦をとる非認知主義者は、それらの文の真理性についての構成的説明を正しいものとみなすことができないように思われる。

おそらくここでミニマリズム作戦の支持者は、自分は道徳的真理に関してだけミニマリズムをとりたいたのであって、他の領域での真

理の構成的説明まで排除するつもりはない、と応じるだろう。だがこうした応答には二つの問題がある。第一に、この応答はミニマリズム作戦がもちえていたはずの力を大幅に弱めてしまうように思われる。前述のように、もともとミニマリズムは伝統的真理論に代わる真理の一般理論として意図されていた。そして、仮にもミニマリズム作戦が一定の説得力をもつとすれば、その力はもっぱらミニマリズムのこうした一般性から来るものだと考えられる。なぜなら、「一般に真理は構成的性質をもたない」という前提の下でなら、「だから道徳的真理にも構成的性質はない」と論じることが可能だが、この一般的前提なしに結論だけを主張することはただの恣意的な態度にしかならないからである。それは単に、自分が認めたくない場面だけで（そして認めたくないというだけの理由で）、他の場面では認めている種類の説明を拒否することだろう。

第二に、もし右の応答が示唆するように、道徳領域ではミニマリズムをとりつつ他の言説領域では真理の構成的説明が成り立つことを認めるとすれば、「真」という語はきわめてもつともらしくない仕方でも多義的であることになってしまふ（*cf.* Asay 2013: 216）。というのも、その場合「真」という語は、ある領域に適用されたときは単に同意や承認の表出装置としてはたらくが、他の領域に適用されたときには内容的解明の可能な記述語としてはたらくことになり、適用領域ごとにその機能の種類さえも変える（おそらく他に類をみ

ないほど) 奇妙なものになるからである。第 5 節でみるように、真理の意味は領域ごとに異なるという見方には展開すべき内実があるが、その展開の仕方はこれではないはずだ。

したがって、ミニマリズム作戦には、道徳以外の真理に関する構成的説明一般の拒否という副作用が伴う、と考えねばならない。もちろんこの点は、筋金入りのミニマリスト (eg. Horwich 1998; Williams 2002) にとっては何の痛手でもないだろう。しかし多くの非認知主義者にとっては、この状況は決して本意ではないはずだ。というのも、彼らはただ道徳領域における真理を(実在論とは異なる仕方)で確保することを望んでいただけで、ミニマリズムと「心中」するつもりまではなかったはずだからである。

4. 準実在論による道徳的真理の特徴づけ

さらに、話を道徳領域に限ったとしても、ミニマリズム作戦にはまた別の問題がある。それは、この作戦の下では非認知主義者の一部が実際に行ってきたことの意義が不可解になってしまうというものだ。ここで想起されるべきはもちろん、ブラックバーンやギバードらによる「準実在論 quasi-realism」のプログラムである。⁽¹⁾ 彼らにとっての出発点は、道徳文は非認知的(非表象的)な心的状態を表出する、という仮定である。そしてその上で彼らは、一見実在論を支持するようにみえる我々の道徳実践のさまざまな特徴も、実際

はこの仮定の下でも十分に説明できることを示そうとする。「準実在論」とはこの説明プログラムに付けられた名前であり、そこで説明が目指されるのは、道徳文が否定や連言などの統語的操作を許容すること、道徳文が他の文と各種の論理的関係に立つこと、道徳文を対象とする信念の一部は知識とされること、といったおなじみの特徴である。

もちろん、これらの特徴の取り込み自体はミニマリズムの拡張過程でも目指されていたものだが、ここで強調すべきは、ブラックバーンらの準実在論がもつ「構築的 constructive」性格である。⁽²⁾ すなわちこのプログラムでは、道徳文への特定のタイプの心的状態の割り当てから出発し、そのタイプの心的状態について成り立つことだけに基づき、右のような諸特徴を実現している構造を具体的に作ってみせる、ということが試みられる。例えば(大幅に単純化して言えば)、我々の実践内で道徳文 A から道徳文 B への推論が妥当と認められているとすれば、一つの文が表出する非表象的な心的状態『A』と『B』の間に、含意に相当するような関係——『A』をもち『B』をもたないことが何らかの意味で不整合であるという関係——が成り立つことを、『A』と『B』のもつ特徴に基づいて示す、といった具合である (Blackburn 1984: 199ff)。つまりこのプログラムでは、基礎にあると仮定された非表象的状態の表出から、我々の道徳実践が示す表面的特徴にまで辿り着くための説明経路を実際

に構築することで、取り込み課題の達成が目指されるのである。

そしてこうしたプログラムには、道徳的真理の概念に対してミニマリズムが許容する以上の実質的な特徴づけを与えることが不可欠な部分として含まれるはずである。というのも、ある種の道徳文が真なる記述文と同様の仕方で振る舞うことは、我々の道徳実践における端的な事実であり、前述のことからして準実在論は、それらの道徳文がみせる「真理然」とした振る舞いを自らの仮定の枠内で再現できなくてはならないからである。より具体的には、これは次のような作業を要求する——非表象的な心的状態をもつ何らかの性質Fを特定することで、道徳文全体の中に、そのFをもつ心的状態を表出するような文からなる部分クラス（「Fクラス」と呼ぼう）を構成する。そして、性質Fをもつ心的状態について成り立つことを基にして、Fクラスがまさに真なる文のクラスとみなしうるような仕方で振る舞うことを示す——と、このような作業である。例えばそこで示す必要があるのは、「ある文とその否定が同時にFクラスに含まれることはない」、「ある文が我々の大多数に信じられていてもそれがFクラスに含まれるとは限らない」といったこと（無矛盾律や信念からの独立性といった真理の基本特徴に対応して）である。実際、ある時期のブラックバーンはまさしく「真理の構成」という表題の下、態度集合の改善プロセスの極限という概念によって右の性質Fに当たるものを提案しているし（Blackburn 1984: 197ff; 彼

の1993: 185も参照）、規範表出主義の枠内で「客観性」を説明するギバードの議論（Gibbard 1990: part III）も実質的にそのような提案を含むものとして解釈できる（Wedgwood 1997）。

こうした試みは、本来きわめて有意義なものであるはずだが、ミニマリズム作戦がその意義を認められるかどうかは定かでない。素直に解釈すれば右のような試みは、「道徳文はどのような条件を満たす場合に真なるものとして振る舞うか」を問うものであり、これはさらに、「道徳文の真理というものは何に存するか」という問いとしても言い換え可能であるように思われる。だがそうだとすると、ミニマリズム作戦をとる者はその試みをまったく的外れで不要なものともみなさざるをえない。なぜなら前述のように、この作戦をとるとは、道徳文が真であるということの根底にあり、その真理性を成り立たせているもの（道徳的真理の「本性」）など存在しない、とすることだからである。非認知主義者の実際の作業を意義不明なものにしてしまうこの作戦は、やはり彼らにとって適切ではないだろう。

5. 真理の機能主義

さて以上三つの節の議論が正しいとすれば、道徳的真理の存在を確保するためミニマリズムに訴えることは非認知主義者にとって得策ではない。では非認知主義者は代わりにどうすればよいか。ここ

で大きな助けになると思われるのは、近年の真理論で提案された「真理の機能主義」(Lynch 2009) という立場である。⁽¹³⁾ これはひとことと言うと、〈真理という性質それ自体〉と〈真理を実現する基盤性質〉を区別する、いわば二層立ての真理論であり、以下で私が示したいのは、この真理論は非認知主義者にとってミニマリズムよりはるかに望ましいということである。実のところ同趣旨の議論はすでに真理の機能主義を提唱したM・リンチによってもなされている(Lynch 2013)。だが、彼がミニマリズム作戦の難点として論じているのは第2節でみた侵食的ミニマリズムの問題だけであるため、その後追加した二つの問題をあわせて検討する以下の議論は固有の意義をもつだろう。

真理の機能主義の内実を明確にするには、先に、心の哲学における機能主義について確認しておくのがよい。心についての機能主義によると、一般に心的性質は、個体のさまざまな性質が織りなす因果的・法則的ネットワークの中での機能的役割によって定義される。例えば〈痛み〉という性質なら、それを定義するのは「侵害刺激によって生じ、回避行動を引き起こし、集中力を低下させ、…」といった一群の機能である。つまり痛みが何であるかは、それが何をするか(ネットワーク内でのどのような位置を占めるか)によって決まるわけである。ここで特に、次の二点に注意しよう。第一に、ある個体が痛みを例化するということは、ただ端的に、何の下支えもな

しに成り立つのではない。むしろそれが成り立つのは、当の個体が右のような「痛み機能」を実現する別の性質を例化することによってである。例えば我々ヒトにおいては、〈C繊維の発火〉という神経生理学的性質が、痛み機能の実現基盤としてはたらくと考えられる。第二に、こうした実現基盤になる性質は、個体のタイプに応じて多様でありうる。例えば、ヒトにおいて痛み機能を実現するのがC繊維の発火だとしても、他の生物種や異星人においては同じ機能が別の性質によって実現されうる(し現にそうだろう)。ある個体が痛みを例化するのは、それが痛み機能を果たす何らかの性質をもつときであり、その性質は何か特定のものである必要はないのである。

さて真理の機能主義によると、真理もまたこのような意味での機能的性質の一種に他ならない。つまり真理は、ある特定の機能的役割によって定義され、多様な基盤性質によって実現可能な性質である。もっとも心的性質の場合と違って、「真理を定義する機能」は主として概念的・推論的なネットワークにおける機能である。そしてその内容は、真理に関する一群の常識 platitudes によって定まると考えられることができる(Jackson et al. 1994; Lynch 2009; Wright 1992)。⁽¹⁴⁾ すなわち大雑把に言って、真理の機能とは「妥当な推論によって保存され、ある文とその否定の両方によってもたれることはなく、それをもつ信念の獲得が我々の探究の目標であり、

…」といったものとして理解することができる。そしてここで強調すべきは、真理の機能主義によると、この一つの「真理機能」は、文が属する言説領域ごとに多様な基盤性質によって実現されうるという点である。すなわち、異なるタイプの個体が異なる基盤性質をもつことで同一の心的性質をもちうるように、異なる言説領域の文はそれぞれ異なる基盤性質をもつことで真理という同一の性質をもつことができる。真理という性質それ自体はあくまで一つでありながら、その性質が実現される仕方は複数ありうる、というのが真理の機能主義の主張である。

ではこのような真理論を採用した場合、非認知主義者は、前節までにみた三つの問題にどう応じることができるだろうか。順番を逆にしてみていこう。

まず第4節でみたのは、ミニマリズム作戦の下では、準実在論のプログラムに含まれる「道徳的真理の特徴づけ」の意義が不可解になつてしまうという問題だった。しかし真理の機能主義をとれば、この問題にはごくシンプルに答えられる。前述のように真理の機能主義は、一般に文の真理性はただ端的に成り立つのではなく、何らかの基盤性質を必要とすると主張していた。つまりある文が真であるためには、その種の文において「真理機能」を実現するような何らかの性質をもつことが必要なのである。そして準実在論による道徳的真理の特徴づけは、まさに道徳文の領域においてこの真理機能

を実現するところの性質を究明する試みとして自然に解釈できる。

なぜなら、もし準実在論が目指すような真理の特徴づけが成功したとすれば、その場合には、真なる道徳文が表出する心的状態に共通するような性質Fを正しく発見できたことになり、それゆえ、道徳文の領域で真理機能を実現する文の性質は、 $\langle F \rangle$ をもつような心的状態を表出する」という性質であることが明らかになるからである。真理の機能主義の下では、一般に真理の説明はこのような実現性質の究明によってはじめて十全になるから、こうした作業には十分な意義が認められる。

次に第3節でみた問題は、ミニマリズム作戦をとると、道徳以外の言説領域の真理についての構成的説明を一般に受け入れられなくなる、というものだった。しかし真理の機能主義の下ではこのような問題はまったく生じない。まず直前で述べた通り、この立場によれば、一般に各領域の真理についての構成的説明（＝真理機能の実現性質の究明）は単に受け入れ可能どころか不可欠である。また重要な点として、真理の機能主義によると、異なる言説領域の文が真になる仕方はそれぞれ異なっていてよい。それゆえ例えば、道徳的真理については準実在論の説明を受け入れながら、外界の真理は対応説的、数学的真理は構成主義的、法的真理は斉合説的、といった異なる構成的説明をそれぞれについて認めることもできる。しかもこれらは、単一の真理機能の実現基盤の解明と考えられているわけ

だから、真理は単に多義的なものと捉えられているのではない。このように道徳以外の領域に関する不要な含意をもたずに済むことは、非認知主義者にとって望ましいはずだ。

最後に、第2節でみた(従来の)侵食的・ミニマリズムの問題はどうだろうか。振り返ると、そこで提起されたのは、(i) 実在論から生じる存在論的・認識論的な問題を避けつつ、(ii) 我々の道徳実践がもつ特徴についての取り込み課題を達成する、という二つの目的を追求する限り、非認知主義は独自の立場であることを止めざるを得ないのではないか、という問題だった。この点について考えるため、いま実際に、非認知主義が真理の機能主義の下で展開されたとしても、そうするとたしかに、この立場は(i)を満たすような独自の立場になっていると言える。その理由は次のとおりだ。先ほどみたように、この立場による道徳的真理の説明は、道徳文が表出する(と想定された)非表象的な心的状態から出発し、その種の心的状態がもつ適切な性質(前述のF)を特定することを通じて、道徳領域において真理機能を実現する文の性質を究明する、という形をとるのだった。つまりこの立場による説明は、あくまで心と言語の領域内に留まっているのである。この点で、いま問題の非認知主義は、同じく道徳的真理の説明のために、道徳文が記述する(と想定された)世界内の事実をもち出す実在論とはたしかに異なっている。したがって、真理の機能主義の下で理解された非認知主義は、

「道徳文の領域で真理機能を実現している性質は何か」という問いに関して実在論と争うような独自の立場として捉えられるのである。もちろん目的(ii)の方は、ミニマリズム作戦をとったときのように自動的に達成されない。つまり真理の機能主義をとる非認知主義者は、我々の道徳実践がもつ特徴のそれぞれについて、自身の仮定の下で本当にその取り込みが可能かどうかを一步ずつ確かめていかねばならない。だがこれは難点というより、非認知主義者を本来の課題に向き合わせることで肯定的に捉えるべきだろう。何と言っても非認知主義は、我々が日々の道徳実践で「本当にやっていること」はその表面的特徴が示唆するのは大きく異なるかもしれない、という着想の追求だったはずだ。であるとすれば非認知主義は、安直な近道によって表面との一致の達成を急ぐより、その表面の下には何も無いと思っている実在論者では決して見ることはない光景をじっくり分節化して描き出すことに努めるべきではないだろうか。

本稿では、道徳的真理の存在を確保するため真理のミニマリズムに訴えることは非認知主義者にとって適切ではないと論じた上で、より適切な真理論として真理の機能主義を提案した。最後に付け加えれば、真理の機能主義はその柔軟性により、道徳実在論にとっても望ましい立場であるように思われる。もしそうだとすれば、道徳

的真理を認めるメタ倫理学理論の争いは総じて、真理の機能主義という共通の土俵上でなされるべきかもしれない。

註

- (1) 注意点が二つある。第一に「非認知主義」という呼称の適切さに関しては議論があり(佐藤 2012)。以下の議論に関する限りは「非記述主義」や「表出主義」でも問題はないが、本稿では定着度の観点から「非認知主義」を用いる。第二に、非認知主義として本稿で考えるのは比較的伝統的なタイプのそれであり、近年のハイブリッド説や認知主義的表出主義 (cf. Schroeder 2010: ch.10; 鈴木 2013) などについては稿を改めて論じた。
- (2) 「creeping」はたゞ「這い寄ってくる」(鈴木 2013) や「忍び寄る」などの意味だが、本稿ではミニマリズムの一種の脅威としての側面を強調するため「侵食的」と意識する。
- (3) 非認知主義の歴史的展開についてより正確には Schroeder 2010: 佐藤 2012 を参照。
- (4) いわゆる「フレイゲルギーチ問題」はこの問題の特殊ケースとして理解できよう。
- (5) 特に Wright 1992 の非デフレ主義的立場も「ミニマリズム」と呼ばれる点に注意。
- (6) ここで、主張や同意や承認など(一般に、コミットメント)は記述文に対しては道徳文に対しても同じように可能だと前提されていることに注意してほしい。
- (7) この定式化に対し、「ミニマリズム」をもち出す非認知主義者の一部は、自分はデフレ主義にコミットするつもりではなく、ただ前節

- で言及されたような同値原則を承認しているだけだ、と言うかもしれない。しかし第一に、本文のような定式化は実際に文献にみられるものである(前節で挙げた文献を参照)。また第二に、より重要な点として、次節でもみるように同値原則自体は対応説とも両立するから、實在論の問題を避けるにはより踏み込んで、真理について語りうることはこの種の原則に尽きるというデフレ主義にまでコミットする必要がある。よって以下では、ここで定式化した限りでのミニマリズム作戦を(その支持者が本当にどれだけのかはおき)それ自体として問題にすることにす。
- (8) それ以前にも同様の論点は Blackburn 1993: 4f.; Gibbard 2003: 184f. にもある。
- (9) ドレイアとギバードには Chrisman 2008: 347ff.; Asay 2013: 217f. ブラックバーンには Asay 2013: 218f. クリスマンには Asay 2013: 217 (note7) がそれぞれ問題点を指摘している。
- (10) ただし以上は「説明」に訴える区別案を一律に退けるものではない。本稿第5節の提案も、ドレイアらとは異なる仕方です「説明」に訴える。関連して Asay 2013: 218ff. も参照。
- (11) 通常「準實在論」は、取り込み課題に応える試み一般を表すが (Blackburn 1984: 171) 本稿ではこの語で、以下にみる構造的な説明プログラムだけを表すことにす。
- (12) ただしこの構築性とどう点々については Schroeder 2010: 131ff. による議論も参照のこと。
- (13) この先駆的な形態は Wright 1992: 24ff. にみられる。
- (14) この点については当然異論もありうる。心の哲学での類似の論争を思い出されたい。

- (ed.) *What is Truth*, de Gruyter: 146-58.
- Wedgwood, R. 1997. Non-cognitivism, Truth and Logic, *Philosophical Studies* 86: 73-91.
- Wright, C., 1992. *Truth and Objectivity*, Harvard UP.
- 佐藤忠雄 2012. ××論理学のぼんちの「非認知主義」の展開『実践哲学研究』35: 41-74.
- 鈴木真 2013. 非認知主義の本柱と意義『実践哲学研究』36: 31-69. (巻末)
- Asay, J. 2013. Truthmaking, Metaethics, and Creeping Minimalism, *Philosophical Studies* 163: 213-32.
- Ayer, A.J. [1936] 1946. *Language, Truth, and Logic, 2nd edition*, Victor Gollancz.
- Blackburn, S. 1984. *Spreading the Word*, Oxford UP.
- Blackburn, S. 1993. *Essays in Quasi-Realism*, Oxford UP.
- Blackburn, S. 2006. Antirealist Expressivism and Quasi-Realism, in *Oxford Handbook of Ethical Theory*, Oxford UP: 146-62.
- Chrisman, M. 2008. Expressivism, Inferentialism, and Saving the Debate, *Philosophy and Phenomenological Research* 77: 334-58.
- Dreier, J. 2004. Meta-ethics and the Problem of Creeping Minimalism, *Philosophical Perspectives* 18: 23-44.
- Gibbard, A. 1990. *Wise Choices, Apt Feelings*, Harvard UP.
- Gibbard, A. 2003. *Thinking How to Live*, Harvard UP.
- Horwich, P. 1998. *Truth, 2nd edition*, Oxford UP.
- Jackson, F., Oppy, G., Smith, M. 1994. Minimalism about Truth Aptness, *Mind* 103: 287-302.
- Kalderon, M. 2005. *Moral Fictionalism*, Oxford UP.
- Lynch, M. 2009. *Truth as One and Many*, Oxford UP.
- Lynch, M. 2013. Expressivism and Plural Truth, *Philosophical Studies* 163: 385-401.
- Mackie, J.L. 1977. *Ethics: Inventing Right and Wrong*, Penguin Books.
- Schroeder, M. 2010. *Noncognitivism in Ethics*, Routledge.
- Williams, M. 2002. On Some Critics of Deflationism, in R. Schantz

une communauté donnée.

Moral truth, minimalism, and non-cognitivism

Takeshi AKIBA

The early non-cognitivists in metaethics used to claim that moral sentences such as “torture is wrong” are neither true nor false, because they are merely expressions of our attitudes or emotions. By contrast, more recent non-cognitivists have come to acknowledge that there are in fact moral truths, i.e., moral sentences that are true. This change of view is often defended by appealing to the so-called minimalist or deflationary theory of truth, according to which “true” is simply an expressive device for agreement or endorsement, so that there is nothing more in saying “S is true” than in saying S itself. With this theory on truth in hand, it becomes surely possible for non-cognitivists to recognize the existence of moral truths, since they can sincerely accept some moral sentences.

However, in my view this is not an appropriate way for non-cognitivists to accommodate the moral truth. A first difficulty is the problem of “creeping minimalism”, which is to the effect that once non-cognitivists invoke the minimalism about truth, they cannot stop invoking minimalism about other notions (such as belief and fact), so that they end up collapsing into realism. A second difficulty is that the appeal to the truth minimalism makes it difficult for non-cognitivists to admit the legitimacy of constitutive explanations about truth in other domains than ethics. A third difficulty is that the appeal to the truth minimalism makes the significance of explanatory project by quasi-realists hardly intelligible.

After considering these difficulties, in the final part of the paper I propose an alternative strategy for non-cognitivists. It consists in holding the “functionalism about truth”, according to which truth is a functionally defined and multiply realizable property. By endorsing this view, I argue, non-cognitivists can successfully meet the three difficulties mentioned above, so it is recommended for them to accept it.